# 竹林SDGs
# グリーンコモンズ・ブックレット

～ようこそ乙訓竹林へ～

発　行：2023年2月
編　集：竹林SDGsプロジェクト実行委員（佐々原悠馬、塚田悠暉、平山明美、石田眞由美、大和田順子）
協　力：向日市環境経済部産業振興課、籔の傍
連絡先：同志社大学総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース　大和田研究室
jowada@mail.doshisha.ac.jp

# はじめに

SDGs 達成のための研究を、より一層推進するために、同志社大学では2022年「“諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ”同志社大学 SDGs 研究」プロジェクトが始まりました。そのルーツとなる同志社英学校の創立者、新島襄は、「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」という言葉を遺していますが、その本質は SDGs が「誰一人取り残さない（no one will be left behind）」ことを誓っていることに通じます。初年度はSDGs達成に向けた研究課題が募集され、17件が採択されました。

その一つである本研究プロジェクト「竹林SDGsを通じたグリーン・コモンズの創出」（以下、竹林SDGs）は、京都の特徴的な竹林に着目しました。京都府乙訓（おとくに）地区（向日市・長岡京市・大山崎町等）は、平安時代から竹材利用の歴史を有し、現在も高級筍の産地であり、８種類の竹垣が続く「竹の径」と名付けられた美しい景観でも知られています。

竹林SDGsでは研究課題として、１．放置竹林問題、２．地域住民がこの貴重な地域資源の価値をあまり理解していない、３．大学生など若い層が竹林の生態や、都市や農村の生態系・生物多様性への関心・理解が低いという３つを取り上げました。これらの課題や解決方法を検討するために、まず乙訓竹林を対象にSDGsとの関わりを図1のように整理しました。この図のフレームは、「SDGs未来都市」（内閣府）を援用しています。環境・社会・経済という３側面から考えるとともに、統合的な取組を推進することが求められます。基盤となる環境面では自然資本として竹林を捉え、社会面では市民団体等による竹林整備・保全活動や都市の自然生態系学習を、経済面では歴史的な竹産業や竹林生態系サービス産業を取り上げました。そして統合的な取組としてマルチステークホルダー（筍農家、竹事業者、地域住民、大学生、ボランティア、行政など）によるパートナーシップ活動による「グリーン・コモンズの創出」を位置づけました。

図1：乙訓竹林とSDGs

筆者作成

一方、都市のグリーン・コモンズ（urban green commons）とは、飯田（2020）によればコミュニティガーデン、市民農園、共同管理されている公園など、土地の所有権にかかわらず、コミュニティによって共同管理された都市の中の自然地のことをさします。そのような土地は、参加者に、生態系に関する多様な学びの機会の提供、生態系に対して責任ある行動の促進、および共同体内で受け継がれてきた社会生態的な知識の継承に寄与するとされる（Colding and Barthel 2013）」といいます。

本研究の目的は、乙訓竹林をフィールドにした調査・研究・実践活動から、竹林グリーン・コモンズの創出を通じた研究課題の解決策を検討することです。調査・研究は、文献調査、先進事例調査、乙訓竹林（初年度は向日市）関係者へのヒヤリング調査等を行うとともに、実践活動として大学生のフィールドワーク、竹林の生物多様性勉強会、ステークホルダー・ダイアローグ等を行うとともに、本冊子を制作しました。今後さらに、竹林グリーン・コモンズにより関わる人や地域住民の心身の健康増進、多世代による地域共創、竹のある暮らし、竹林景観の再生、生態系サービス産業の可能性などについての議論や活動が活発になることを願っています。

なお、本冊子は竹林SDGs実行委員の政策学部佐々原悠馬さん、塚田悠暉さん、平山明見さん、総合政策科学研究科の石田眞由美さんと共に制作しました。また、市民団体「籔の傍（やぶのそば）」代表小関皆乎さんをはじめ、ご執筆いただいた皆さまには大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

同志社大学総合政策科学研究科
ソーシャル・イノベーションコース 教授
大和田順子

【参考文献】
飯田晶子・曽我昌史・土屋一彬
『人と生態系のダイナミクス 3都市生態系の歴史と未来』
（2020年朝倉書店）

目次

P.02 はじめに
P.03 京都の竹林の状況
P.04 乙訓竹林の概要と現状、課題
P.06 タケノコ栽培の一年「京都式軟化栽培法」
P.07 竹の里に住む
P.08 京都の竹産業
P.09 竹林と生態系
P.10 竹林SDGsプロジェクト活動、地域づくり授業フィールドワーク
P.12 活動団体紹介：籔の傍（やぶのそば）／向日市竹林ボランティア
P.13 先進事例：若竹の杜 若山農場／純国産メンマプロジェクト
P.14 プロジェクトのふりかえり



# 京都の竹林の状況

## 竹の種類

京都府内では、主に、三大有用竹として知られるマダケ属のモウソウチク、マダケ、ハチク（クロチク、ウンモンチク）の竹林が見られます。これらはかつて食料、材、土留などを目的に先人に必要とされ、植えられたものです。これら3種には、稈の形態（高さ、節部のでっぱりの数）、稈鞘（竹皮）の形や模様、出筍時期などに明らかな違いがありますので、慣れれば初心者でも識別できます。複数種混じった竹林もあることには注意が必要です。これら3種以外にも、ホテイチク、カンチク、シホウチク、トウチク、オカメザサの野生化した竹林も散見されます。こうした種類を一度に見られる場所として洛西竹林公園が有名です。他に、京都府立植物園、松花堂庭園、花明山植物園、森林総合研究所関西支所、京都大学 フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地もあります。

## 竹林の面積

京都府に限った話ではありませんが、竹林は山林のみならず農地、空き地、河川敷などにも栽培あるいは野生化して生育しています。これら竹林の面積は府内全域でどのくらいなのでしょうか。これをきっちりと把握するのは相当難しいのが現状です。ただ、およその面積を知る統計資料がないわけではなく、例えば京都府林業統計があります。令和3年度の情報を閲覧すると、地域森林計画上の森林内の竹林面積は以下のようになっています。モウソウチクが3,363.95ha、マダケが1,730.18ha、ハチクが115.00ha、その他が75.22haで合計5,284.35ha。47都道府県の中で辛うじてトップ10に入るほどの面積です。府内の民有林の総面積は333,813.37haであることから、竹林率は1.58％と計算されます。ただ、この数値は山林における実際の竹林面積よりも過小評価されていることが知られています。今後、空中写真の目視判読や機械学習の技術を用いた竹林判別によって、山林エリアのみならず府内全域にわたり、より妥当な竹林面積の把握が望まれます。また、現地踏査によって竹の種類や既知の竹林のカテゴリー（管理竹林、放置竹林、拡大竹林、木竹混交林）ごとに現況を整理することも重要でしょう。市町村レベルでこうしたことに長らく取り組まれている例えば長岡京市は全国的にみても重要な事例です。平成23年に京都竹カフェから発行された「竹林マップ」のアップデートも望まれます。

## 竹林の開花

地下茎を伸ばし、筍を出す生活がよく知られますが、実は開花することもあります。主要な3種について紹介します。まずモウソウチクでは、部分開花といって竹林の中の1本から数十本の稈が開花します。毎年のようにどこかの竹林で確認されるような現象です。一方、京都大学の上賀茂試験地のタケ見本園のように、部分開花時に取られた種を蒔き、開花までの年数を調べると一斉開花したという記録もあります。上賀茂試験地の場合、1913年、1931年、1956年、1956年発芽したモウソウチクがそれぞれ1979年、1997年、2021年、2022年に一斉開花しました。

次に、マダケやハチク（クロチク、ウンモンチク）はおよそ120年に一度一斉開花することが知られています。マダケは直近で1950年から1970年代に京都を含めた全国各地で順次開花しました。ハチクでは現在明治後期以来の一斉開花期を迎えており、筆者らが率先して開花情報を収集して実態把握に努めています。竹林景観ネットワークHPではGoogleフォームが作られ、一般の方からの情報も集めています。京都府内では2000年代に初めて開花が確認され、2010年代後半から開花の目撃件数が増えてきました。2022年12月現在、京都府内からは150件程度の開花情報が集まっています。主にハチク類です。庭園や筍栽培地でも開花しており、開花後に竹林が衰退した後、どのように管理するのがよいか喫緊の課題になっています。

## 竹林でみられる生き物

竹林では他の生き物が少ないと言われますが、あまり見かけない生き物の重要な住処になっている場合もあります。京都府内で私が知る例として、ヤマトサンショウウオ、ヒナノシャクジョウ科の植物、ホンゴウソウ、マツバラン、コクラン、ヤツシロランの仲間、キヌガサタケが挙げられます。筍を食べる動物では、カメラトラップを用いた私の野外調査や竹林管理者への聞き取りによって、二ホンジカ、イノシシ、ニホンザル、ノウサギを把握しています。二ホンジカやイノシシの個体密度が高い場合、親竹が更新できないほどに筍が食べつくされ、竹林の成長が阻害される例もあります（Kobayashi 2020 景観生態学25）。その他、タイワンタケクマバチの定着も最近の話題として外せません。直径2〜3㎝程度の主に枯れ始めの稈に穴をあけ、巣を作り、越冬していることも観察されています。ここ数年で目立っており、今後の動向が気になります。

## 竹の利活用

一昔前よりも大幅に少なくなったとはいえ、管理竹林（多くがモウソウチクやマダケ）で筍の栽培や竹材の採取が行われています。京都式（軟化）栽培法として知られるモウソウチクの筍栽培技術、京銘竹の製造・加工技術など、京都で編み出された技術を後世にどのように残していくかが今課題となっています。令和3年度の特用林産基礎資料（特用林産物生産統計調査　結果報告書）を閲覧すると、生産量は竹材で21.9千束（全国5位、2％）、筍で3,163.9トン（全国3位、16％）となっています。これらのデータの集め方はHPに出ているので興味のある方はご覧ください。府内では、最近の利用方法として観光客をターゲットにした観賞用の竹林も有名です。例えば、嵯峨嵐山の竹林の小径や高台寺の竹林が有名です。ここ数十年で目立った放置竹林、拡大竹林、木竹混交林の一部については、多様な有効利用を目指す行政や市民団体らによって新たに使われ、管理竹林に戻そうとする動きもあります。籔の傍の活動地もその一つでしょう。

最後に、竹林整備団体をサポートする現在の制度について紹介します。府の担当者によれば、竹林整備に特化した事業はないようですが、ふるさとの里山林保全活動推進事業（府費）や林野庁森林・山村多面的機能発揮対策事業（国費）などがあるそうです。団体の活動や機械導入などの支援ができるとのことです。特用林産物として、業として生産等する場合には豊かな森の恵み創造事業（特用林産物生産支援）（府費）の活用が可能かもしれないとのことです。
以上、京都の竹林の状況について5つの項目に分けて紹介しました。

森林総合研究所関西支所
研究員
小林 慧人
（こばやし・けいと）

**Profile** ［プロフィール］
同志社大学理工学部卒、京都大学大学院農学研究科卒。2021年3月に日本のタケの生態に関する研究で博士号（農学博士）を取得。現在、森林総合研究所関西支所テニュアトラック研究員。専門は森林生態（竹林生態）学。竹文化振興協会発行の会誌「竹」や学術雑誌Bamboo Journalの編集に携わる。

# 乙訓（おとくに）竹林の概要と現状、課題

## 竹林の歴史・文化

本プロジェクトの活動フィールドである乙訓竹林（注１）は、京都市に隣接する京都府西山、乙訓地域に立地し、古くからの竹林・竹の歴史文化を持つ。

古代の法典『延喜式』（927年完成）に、朝廷に納める箸用の竹が、「乙訓園」産出と記されており、また「竹取物語」発祥の地ひとつとしても伝えられている。古都・長岡京（784-794年）ならびに平安京（794-1869年）が置かれた京都市近郊という立地によって、竹材利用やタケノコ栽培も、他の地方には見られない高度に洗練された竹の文化が確立・継承されてきた。

生活用品等に利用されて来た竹材は、1960年頃から次第にプラスチックなどの石油系製 品にとって代わられるようになった。時を同じくして、高度成長期の市街化の波が押し寄せ、乙訓地域においても、古くからの集落の周囲に多かったマダケやハチクの竹林は、用途の減少とともに宅地に姿を変えていった。竹材用の竹林は大きく減少したが、京銘竹を扱う専門 的業者は引き続き、京都における質の高い伝統的な竹工芸や京建築に従事し、竹の文化の伝統を継承・体現している（向日市 2018）。

一方、タケノコ栽培のモウソウチクの竹林では、現在も、乙訓地域のタケノコ栽培に用いられてきた特有の栽培法、京都式軟化栽培法（詳細は６ページ）による高級筍の栽培が行われている。この栽培法は明治時代頃から始まったとされている。

向日市では、2000年から、竹林散策路「竹の径」の整備を始めた。高級筍を生産するため手間と時間をかけた筍畑ならびに８種類の竹垣は、手入れされた清々しく美しい竹林景観を生み出している。国土交通省の「手づくり郷土賞」（2001年、2015年）、京都府選定文化的景観(2010年)に選ばれるなど、市民の憩いの場であるとともに年間5万人（向日市調べ　2020年）の観光客が訪れる観光資源となっている。生産竹林だけでなく、観光竹林としての利用も行われるようになった。

## 竹林の現状

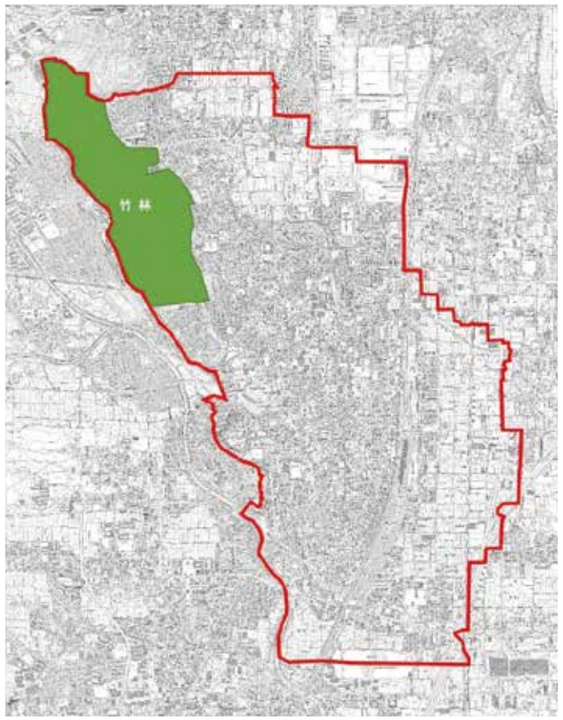
京都府総合計画(2019年策定)「基本計画（観光分野）」の中の「もうひとつの京都の推進と地域連携」において、乙訓地域は「竹の里・乙訓」として「豊富な歴史や筍等を観光資源とし、京都市隣接の好条件を生かした戦略的な地域ブランド化により、観光交流・消費額を拡大」を目指すという方向性が示されている。(計画期間は、2019年10月2日～2023年度末)

竹林の景観保全・整備、観光における竹林・竹の活用等については、行政や官民連携での事業や施策、市民ボランティア団体の活動も実施されている。例えば、前述の向日市の「竹の径」事業は2000年から官民連携で取り組み、放置竹林の環境整備と観光による地域活性に寄与している。また散策路「竹の径」の竹垣づくりを行うことで、次世代への技術伝承が行われている。

しかしながら、筍の名産地であり観光にも寄与する竹林であるが、放置竹林(耕作放棄竹林)化が見受けられる。向日市において、タケノコ栽培が実際に行われている筍畑は約43ha、竹林面積の約55%である。そして竹林面積全体の約30%が放置竹林となっている（表２）。放置竹林化の原因の一つとして、筍農家の高齢化、後継者不足が挙げられる。

乙訓地域の竹林面積は、令和４年度京都府林業等統計によると、約314haである。竹林面積は、総面積の9.6%、森林のうち約30%が竹林である。向日市においては、竹林面積は、総面積772haの約10%、森林のうちの85%を占める（表１）。乙訓地域の他市町と比較して向日市は、緑の環境・景観保全を考える上でも、竹林の保全・在り方が重要である。

図. 向日市の竹林




出典：2022年、向日市環境経済部産業振興課

【表１】乙訓地域（注2）の竹林面積（単位ha）

| | 竹林面積 a | 森林面積 b | 総面積 c | 竹林率 a/c | 森林率 b/c | 竹林/森林 a/b | 竹林面積 1957年d | 減少率 1-a/d |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 向日市 | 78.19 | 92.19 | 772 | 10.1% | 11.9% | 84.8% | 132.30 | 40.9% |
| 長岡京市 | 159.82 | 786.14 | 1,917 | 8.3% | 41.0% | 20.3% | 259.93 | 38.5% |
| 大山崎町 | 76.42 | 182.55 | 597 | 12.8% | 30.6% | 41.9% | 125.95 | 39.3% |
| 乙訓地域計 | 314.43 | 1,060.88 | 3,286 | 9.6% | 32.3% | 29.6% | 518.18 | 39.3% |

出典：令和4年京都府林業統計より（竹林面積1957年は鈴木(1960)より）筆者作成

【表２】向日市の竹林面積

| | 畑地 | 山林 | 竹林合計 |
|---|---|---|---|
| 竹林 | 48ha | 30ha | 78ha |
| 放置竹林 | 約5ha | 約21ha | 約26ha |
| 放置竹林率 | 約10% | 約70% | 約30% |

出典：2020年向日市調べ 筆者作成



## 向日市と向日丘陵

本プロジェクト（2022年度）の活動フィールドとなった、向日市と向日丘陵について紹介する。

### 1　京都府向日市

京都府向日市は、京都府南部の乙訓地域に位置し、京都市都心部からは、南西に約7kmの至近距離に位置する。本市の北側、東側、西側は京都市、南側は長岡京市と接しており、市域は、東西約2km、南北約4km、面積 7.72 ㎢で、全国で3番目に小さく西日本で最もコンパクトな市である。西部一帯には、向日丘陵が横たわり、竹林が広がる緑豊かな地域となっている。人口は56,282人（2023年1月）である。2022年に市制50周年を迎えた。

### 2　向日丘陵

向日丘陵（西の岡丘陵とも呼ばれる）は、向日市の西部一帯を南北に細長く横たわる、標高35メートルから80メートルの丘陵であり、竹林で覆われている。（丘陵の範囲はは、北側の京都市・嵐山の桂川西岸から、終末端となる南西側は向日市・向日神社辺りまである。）また、丘陵には、乙訓古墳群に含まれる寺戸大塚古墳はじめとした古墳が点在し、古くからの歴史を持つ土地柄である。

向日市の竹林のほとんどが向日丘陵にある竹林である。周辺の平地部にも存在した竹林は都市開発、ニュータウン開発により住宅街となり、丘陵は竹林の緑の小山となっている。

丘陵には酸性の粘土質の地層があり、白く柔らかい高級筍を生産するのに適している。竹林散策路「竹の径」が整備され、独特の土の色と竹のコントラストが美しい筍畑の景観が広がっている。イベントとして、「竹の径」をライトアップする「かぐやの夕べ」を、毎年10月に向日市主催で開催している。

[注1] 1879年（明治12年）に行政区画として発足した当時の乙訓郡域は、現在の以下の区域にあたる。京都市伏見区の一部（久我各町・羽束師各町・旧淀村（淀樋爪町、淀水垂町、淀大下津町））、南区の一部（久世各町）、西京区の一部（大枝地区・大原野地区）／向日市、長岡京市の全域／乙訓郡大山崎町。
本稿の「京都西山の乙訓竹林」における「乙訓」については、旧乙訓郡である京都市西京区の一部（大枝地区・大原野地区）、向日市、長岡京市、乙訓郡大山崎町の一帯の地域としている。

[注2] 表１については、現在の「乙訓地域」にあたる、向日市、長岡京市、大山崎町のデータを記載している。

文：石田眞由美
（同志社大学総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース）

参考文献
【日本語文献】
内村悦三(2009)『現在に生かす竹資源』創森社 京都府（2022）京都府林業統計令和４年版 京都府向日市（2018）向日市歴史的風致維持向上計画 京都府向日市（2020）第3次向日市都市計画マスタープラン 鈴木健敬(1960)「（研究資料）京都府乙訓郡における農家の竹林研究について」『林業試験場研究報告』（第121号）
【URLリスト】
京都府（2019）「京都府総合計画 基本計画」京都府ホームページ
(2022年7月26日取得、
https://www.pref.kyoto.jp/shinsougoukeikaku/documents/2kihon.pdf)。
京都府向日市(2021)「歴史」向日市ホームページ（2022年7月25日取得、
https://www.city.muko.kyoto.jp/kurashi/shisei/gaiyo/8/1449541425302.html

竹林風景

晴れた日の竹林

筍畑（土入れの頃）

竹の径

# 地域で受け継がれる栽培法「京都式軟化栽培法」

京都西山、乙訓地域一帯のタケノコの栽培方法は「京都式軟化栽培法」と呼ばれています。この栽培法の特徴は、親竹の先を止めること（しん止め）、敷きワラ、土入れを施すことです。竹林はタケノコを栽培する筍畑として、年間を通して、手間をかけ丁寧に手入れが行われ、最高品質のタケノコが産出されます。

## 「京都式軟化栽培法」筍畑の1年

### 01 タケノコ掘り、タケノコの収穫

3月中旬の初出荷を皮切りに収穫と出荷が始まります。収穫のピークは4月中旬から5月初旬にかけてで、たくさんのタケノコが市場に出ます。収穫には「ホリ」という独特のクワを用い、まだ地中にあるタケノコを掘り上げます。タケノコを掘った穴には肥料を入れ栄養補給（お礼肥）をします。

### 02 親竹の選定

4月上旬に次の年に残す親竹を選定します。良質のタケノコを栽培するには良い親竹を選定することが重要です。

### 03 しん止め

5月上旬、成長途中の親竹の先端を折って背を低くし、地表の日あたりを良くすること、成長を抑制し根に栄養を回すことで、タケノコの発生を促進するほか、台風等で竹が倒れるのを防ぎます。

### 04 サバエ刈り、草引き、夏肥

6月～7月、タケノコの時季を外れて生えてきた細い竹（サバエ）が親竹の育成の妨げにならないように切り、草引きも行います。8月頃、夏の施肥では、良質なタケノコができるよう、竹林に広がる竹の細い根に栄養を蓄えさせます。

### 05 親竹の更新

9月頃、しん止めで親竹として残した竹の近くにある、6～7年たった古い親竹を伐採し、新しい親竹に栄養をいきわたらせます。

### 06 敷きワラ・土入れ・冬肥

11月～1月、冬期にも追肥をします。また、保温と土を柔らかくすることを目的に敷きワラや土入れを行います。敷いたワラが腐ると肥料になるのに加え、タケノコが地表に出るのを遅らせるため、良質なタケノコを育てるのに欠かせない作業です。

［参考文献］

広報むこう令和2年3月号（No.1150）2020年
向日市歴史的風致維持向上計画　2018年
長岡京市HP　たけのこの四季
https://www.city.nagaokakyo.lg.jp/
近畿農政局　地域特産タケノコの素晴らしさを多くの人に伝えたい！
https://www.maff.go.jp/kinki/tiiki/kyoto/shimizu211210.html




# 竹の里に住む

## はじめに

物集女地区の放置竹林を何とかしたいので手伝って欲しいという要望に応じ、竹林に子どもたちと秘密基地をつくり始めて5年になる。コロナ禍ということもあって、いつのまにか子どもたちの秘密基地は大人たちの交流基地になっている。ここでの活動はタケノコもしくはメンマ生産のための竹林整備活動、竹工芸教室、竹舞台での合気道教室、遊び場つくり、竹垣制作による竹の径景観整備活動など、いずれも「藪の傍」(代表:小関皆乎、大塚正洋）の主導で行われて来たものである。その活動と向日市地域に与える意味については2019年に書いた(「竹の里に住む」竹文化振興協会会誌「竹」第140号)。

丘陵を埋める竹林に増えている放置竹林を子どもたちの遊び場に開くことで、周辺に居住する市民との新たな関係をつくる。私的な閉ざされた畑地を市民に開いて利用することで、地域の活性化、故郷化をもたらせることができるのではないかと。この思いは2022年から乙訓の竹林を日本ないし世界農業遺産をめがけて磨き上げたいという同志社大学の大和田順子教授の参画により、新たな目標と実現へのパースペクティブ(その一つの指標がグリーン・コモンズ)によってより確固たる地盤を得られるのではないかと期待している。

## 竹林の恵み

竹林はそもそもタケノコ畑だ。ここで産するタケノコは美味しい。春にはタケノコを掘ってもいいですよとなれば、多くの人が竹林整備に参加する。実に、食べられるものを得るということに勝る本能的な喜びはない。 古来、竹なる素材は、柱や梁、垂木といった建築用材のほか、物干し竿、椅子、水筒など実にいろいろな生活の道具に用いられてきた。それで昔から近くの里山に栽培されて来た。空洞と節からなる構造は、そのままで水を汲む器になり、料理を盛る鉢になり、あるいはご飯を炊くことも出来るし、割って削れば箸となる。身近な材料としてこれほど重宝な素材はない。私もことあるごとに、プラスチック製品しか知らない子どもたちに竹でコップと箸をつくらせる。子どもたちの喜びようは、昔も今も同じである。器がもっとも身近なものとすれば、割竹を編んでつくる籠は もっとも高度で美しいものであろう。様々な種類の編み方と籠の形態には、その民族の感性の違い、到達している深さが感じられる。目の前にある竹を割って籠を編んでつくる教室もまた多くの現代人にとって、自分の手に技術を得る喜びをもたらしてくれるものだ。しかしなんといっても、整備された竹林自体が美しい。単に外から眺め、写真に収めるだけはわからない、竹林の中を歩いてはじめて身体で受け止められる美しさ、快感がある。それをゆっくり感じていられる静かな場があれば、もっと多くの人をとりこにするだろう。そんな場として、2018年に竹テラス、2019年竹茶室、そ して2020年に竹舞台をこしらえた。竹テラスと竹茶室は仮設のもので製作後に解体した。常設されている6m×6mの竹舞台は、ここで合気道教室を開きたいという竹田明敬さんの要望に応えたものだが、竹林の中の青空天井の18畳の座敷として、ほかにもいろいろなことに使える。2022年の秋には落語会も行われた。この舞台に夏の日差しや雨対策に屋根を架けられないかという相談もある。竹を用いた大きな吊屋根もやってみたいものだが、舞台を覆う大きな屋根がこの風景に与えるインパクトは重大だ。あくまで竹林の自然な風景を優先したいと考えている。

戦後、私たちは便利さ快適さ、そして利益のためになりふり構わずこしらえ、自然や風景を壊して来た。そろそろそれをほんとうに考え直さねばならぬ時期に来ている。物集女の竹林も人間がつくった人口の畑で生態系としても決して豊かとは言えないが、上に挙げたような「恵み」をもたらしてくれる立派な自然である。これからはこうした自然の恵みをきちんと評価し、自然を学んでいくことに幸福を見出す時代となるだろう。物集女竹林の活動がそんな先進事例として注目されるよう微力ながら応援していきたい。

竹舞台での合気道教室風景（写真:小関皆乎）

竹茶室（2019年）

建築家
京都建築専門学校 校長
**佐野 春仁**
（さの・はるひと）

**Profile** ［プロフィール］
1954年生まれ。京大建築学科卒、同大学院修了、ボーデン・バウ建築研究所設立。現在、京都建築専門学校校長、同よしやまち町家研究室代表。現職のほか財団法人啓明社理事、「京北の木で家をつくろう」ネットワーク副代表。

# 京都の竹産業

## 竹屋と籠屋

竹産業の竹と筍は特用林産物に分類され、竹は山林、筍は農地という地目で基本的に栽培管理されている。竹は日本に約600種類ある竹笹類の中で、主に使われているのは「孟宗竹」「真竹」「淡竹」の3種類で生産の9割を占め、「日本三大有用竹」といわれている。

竹を扱う店は一般に「竹屋」と呼ばれることが多いが、事業の内容については様々な内容に分類される。大きく分けると竹の伐りだし（青竹）、製竹（青竹・晒竹・白竹）、各種竹製品の加工、各種材料の分野に分かれる。京都では昔、竹屋と籠屋の関係は良くなかったと伝えられている。竹屋は籠屋のことを「少ししか買わないのに文句ばかり言うな。竹も真っすぐ切れないのに」と言い、籠屋は竹屋のことを「傷のない伸びの良い晒竹を持ってこい」という具合だった。

京都の竹が世界的に有名になったのは、このような1300年の都で培われた技術集団という存在もあるが、1880年にエジソンが竹フィラメントに京都・八幡の竹を使ったということも大きな理由として挙げることができるだろう。すでに140年以上前のことだ。

## 京都の竹産業

京都における竹産業は、1960年代に京都府竹産業振興連合会が組織された。連合会には6つの組合（京都竹材商業協同組合、京都竹工芸品協同組合、京都竹材商組合、京都銘竹生産組合、亀岡竹材業組合、両丹竹材商工業組合）が参加し、企業数は54社あり、生産流通販売が拡大した。しかしながら2022年現在、廃業や後継者不足などの影響で、京都竹材商業協同組合、京都竹工芸品協同組合、京都竹材商組合の3組合32社にまで減っている。需要の低迷による販売の減少、販売の減少による供給減、供給不足による販売価格の上昇など悪循環に陥ってますます放置竹林が拡大しているのが現状である。

また、他の伝統産業に使われている竹製の道具類が作れなくなっている。作ったことのある経験者も亡くなり、伝統産業業界が本物の道具が作れないことによって、品質の低下を招くという苦境に陥っている。本物の製品を作るには形だけでなく実質に使える業務用の道具が必要である。例えば、製茶の道具類の篩（ふるい）、ボテ※、箕（み）、大籠（おおかご）、蒸篭（せいろ）の簾（すだれ）、米揚笊（こめあげざる）、筍用の手篭（てかご）など。

※ボテとはかごを紙張りにしたものの総称

## 「京都の竹」を伝統的工芸品へ

そのような状況の中、２０１４年に京都府の伝統産業（京もの指定工芸品）31品目の中に「京銘竹」として白竹・図面角竹・亀甲竹・胡麻竹が、「京竹工芸」として丸竹加工・編組加工の2品目が認定された。茶華道文化の発展に伴い、伝統技術と良質の竹材料に創意工夫を加えた京都ならではの建材・インテリアエクステリア分野などの製品を生み出している。

もう一歩進めて、先人の残した歴史ある財産である「京都の竹」、すなわち伝統に培われた竹の栽培技術と製品加工技術を大切にするとともに、京都の竹産業を発展させるため、業界内の分野を乗り越え一致協力し、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（昭和49年法律第57号、以下「伝産法」）に基づく経済産業大臣の指定を、2024年度の認定を目標に申請することになった。

この法律の目的は、伝統的工芸品産業の振興により、国民生活に豊かさと潤いを与えるとともに、伝統的技術・技法の伝承や地域の経済発展・雇用の創出に寄与することである。2022年11月現在、伝産法の指定を受けているものは全国240品目、京都府には14品目ある。

申請にあたっては、5つの要件（①日用品であること、②手工業的であること、③伝統的な（100年以上）技術・技法であること、④伝統的に使用された原材料であること、⑤一定の地域で産地形成がなされていること）を満たすことが必要だ。申請に関しては行政の協力が欠かせない。「京都の竹」についても100年以上の歴史があることを証明しなければならないが、日時、写真、作者などがわかる資料を探すことが意外にも難しく、これまで申請することができなかった。

伝産法の指定品目になることで国の「伝統的工芸品」という名称が使えるようになり、技術者は「伝統工芸士」という国家資格を持ち活動されることで付加価値は上がっていくだろう。また、組合としては振興計画を策定・認定を受けることにより支援策を活用し、竹産業の産地振興及び伝統的工芸品全体の振興につなげていきたいと考えている。

## 注目が集まる日本の竹

近年SDGsという言葉が広まり、放置竹林が話題に上ることも増え、自然素材の竹に注目が集まっている。国産にこだわった製品を取り入れたいということで、企業と竹業界との接触が増え、製品開発も進んでいる。日本の竹を使った脱プラ、脱アルミ製品の問い合わせが増えつつあるが、技術・納期・価格で条件が合わないことが多い状況である。また、自然素材である竹を使った製品企画は、竹炭・竹パウダーなども竹業界以外にも広範囲に広がってきており、竹の可能性はたいへん高く、注目度も大きいと感じている。

竹業界はこれらの要望に応えるため、以下に取り組む必要がある。

- ●竹の特性を最大限に生かした製品の絶縁性、成長性、硬度、成分などを生かした研究をすることで新製品を開発する
- ●1940年から進んでいない竹製作加工技術・竹栽培技術・竹伐り技術のデータ化、機械化をはかり、海外に依存している生産を国内に切り替え安定供給をはかる
- ●竹および竹の集成材が建築の構造材として使えるように働きかけるこの機会を逃すことなく竹業界の英知を結集し、日本製品ここにありと存在感を示し、日本から世界へと飛び出していこう。

京都大学、京都市産業技術研究所と2008年に共同開発した、竹編組の電気自動車「バングー」

東洋竹工株式会社
会長
**大塚 正洋**
（おおつか・まさひろ）

Profile ［プロフィール］

東洋竹工は、明治時代に竹材業を始め、1959年に加工部門を独立。東洋の竹を西洋へ紹介すべく「バンブーレース」を考案。製品開発型企業として「京らんま」「竹すべり」などを開発。茶華道具から竹を使ったハイテク関連商品・現代的デザインのインテリア商品など新たな竹の用途開発にも力を入れている。



# 竹林と生態系

## 日本における竹の歴史

竹林は京都のみならず、日本列島の温暖な地域を特徴づける景観のひとつである。竹林を構成する代表的な竹にはマダケとモウソウチクがあり、そのほかにもハチクやシホウチクをはじめとした数々の竹が知られていて、筍や竹材、あるいは造園材料として身近に利用されてきた。しかしながら、有史以前からいまみられるような竹林が存在したわけではない。日本最古の書物であるとされる『古事記』や『日本書紀』にも竹に関する記述はあるが、その実態ははっきりとしていない。マダケは日本に自生していた可能性はあるが、おそらく８世紀ごろに中国大陸から持ち込まれて栽培されたものが元になっているとされる。モウソウチクも古くから日本に渡来していたという説はあるが、確かな史料としては1736年に当時薩摩藩主であった島津吉貴が中国・江南から琉球経由で入った２株のモウソウチク（江南竹）を現在の鹿児島市にある仙巌園（いまの磯庭園）に植えたのが始まりである。ハチクやシホウチクも、中国原産の外来種である。

マダケは筍と竹材、モウソウチクは主に筍を得るため、有用植物として日本の暖地に広く栽培されて、現在見られるような竹林が成立してきた。しかし、海外から筍や竹材が安価で輸入されるようになり、多くの竹林で手入れが行き届かなくなって管理放棄されたが、他の植物の侵入を許さずに周辺に拡大するために「竹害」と呼ばれるまでに至っている。

## 竹林の生物多様性

マダケにしてもモウソウチクにしても、数十年に一度しか開花・結実しないことが知られている。そのため、地下茎で増殖するが、盛んに光合成する親の竹から必要な養分をもらうので、筍の生長は著しく早い。反面、岩礫面が固いところでは、地下茎の伸長が邪魔されて広がることができない。地震学者で元京都大学総長の尾池和夫は、京都盆地では活断層でできた破砕帯と筍の産地が一致するという、たいへん興味深い見解を述べている。破砕帯とは、断層活動によって岩石が細かく砕かれて、数メートル以上の幅になっている場所のことである。「大地震の繰り返しで破砕された山の麓は崩れやすい。人々は竹を植えて災害を防いだ。活断層が盆地と山地の境にあるおかげで、おいしい筍が京都盆地の名産となった。明治の陸地測量部の地図を見ると、竹林の列と活断層がみごとに対応しているのがわかる。」

このようにもっぱら筍を採取する目的で、京都盆地ではマダケやモウソウチクの竹林は、畑のように維持管理されてきた。ちょうど野菜の畑で作物以外の動植物を害虫や雑草として排除されてきたように、よく手入れされた竹林は竹以外の植物は生えておらず、放棄されても密集した竹のせいで日光が地表に届かないために新たな植物の侵入が妨げられている。そのため、地上部の生物多様性は著しく乏しいといわざるを得ない。

かろうじて他の植生とは異なる生物相がみられるのは、竹の棹にできる空洞に営巣する管住性ハチ類（借孔性ハチ類とも）と呼ばれるハチの仲間である。ハナバチ類とカリバチ類を含めて、日本にはおよそ60種の管住性ハチ類が知られている。春にフジの花に集まるクマバチ（キムネクマバチ）もそのひとつである。近年、注目されている外来生物のひとつに、タイワンタケクマバチが挙げられる。日本では2006年に豊田市で初めて報告され、愛知県、静岡県、岐阜県、三重県、長野県、福井県、石川県、京都府、大阪府、滋賀県に広がっている。このタイワンタケクマバチも在来種のクマバチ同様に管住性ハチ類で、日本へは竹材か竹製品の輸入に伴って意図せず入ったと考えられる。遺伝子解析によって愛知県豊田市で採集された個体は，中国本土から侵入したことがわかっている。

## 竹林の生態系サービス産業

いっぽうで、竹林の地下部には、独特の菌相（キノコやカビの仲間）が形成されているようだ。たとえば、中華材料として珍重されるキヌガサタケは竹林によく出現されることがわかっている。また菌従属栄養植物（かつて腐生植物と呼ばれていた）のアキザキヤツシロランやクロヤツシロラン（いずれもラン科）は竹林に特異的に見られる。これら菌従属栄養植物は、緑色の葉、つまり葉緑体があって光合成能力のある葉を持たず、自ら光合成をおこなうことなく菌根を通じて菌類から生長・繁殖に必要なすべての栄養を得ている。竹林に特異的に見られるヤツシロランの仲間は、竹林に発生する菌類から栄養を得ていることは間違いない。

国連によるミレニアム生態系評価では、人間社会が生態系から受ける自然の恵みを生態系サービスと名づけ、[1]供給サービス（食料、水、燃料、繊維、生物化学物質、遺伝資源など、生態系が生産する財によって得られる物質的利益）、[2]調整サービス（気候・病気・洪水の制御、無毒化、水の浄化など、生態系プロセスの制御によって得られる利益）、[3]文化サービス（精神性、レクリエーション、美観、インスピレーション、教育、共同体意識、象徴など、生態系から受ける非物質的利益）、[4]基盤サービス（土壌形成、栄養塩循環、一次生産など、供給・調整・文化の3つの生態系サービスがうまく機能するための生態系の基本的なはたらき）に整理した。身の回りの生態系を活かすには、生態系サービスの一部ではなく、なるべくたくさんの生態系サービスを使って「小さなビジネス」を興していく必要がある。これまで筍の採取という供給サービスの一部を得るためだけに維持されてきた竹林であるが、竹炭や竹チップをつくって燃料や肥料としての活用を図るとか、竹林を整備して子どもたちや地域のコミュニティが集る場所にするとか、観光客や映画の撮影隊が訪れるような場所として売り出すとか、ワカヤマファームの若山太郎社長の提唱されているように「竹林から分け与えられる資源を余すところなく、隅から隅まで活用するビジネスモデルをつくる」ことが求められている。

キヌガサタケ（2022年６月22日、写真：寺崎正直）

植物生態学
京都大学名誉教授
**湯本 貴和**
（ゆもと・たかかず）

Profile ［プロフィール］

元京都大学霊長類研究所長、前日本生態学会長、元「野生生物と社会」学会長。徳島県出身。1987年京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。神戸大学、京都大学生態学研究センター、総合地球環境学研究所、京都大学霊長類研究所に勤務した。近著：『はじめて学ぶ生物文化多様性』（共編著・講談社・2020）、『ユネスコエコパーク―地域の実践が育てる自然保護』（共編著・京都大学学術出版会・2019）他

# 竹林SDGsプロジェクト活動報告

ここでは、竹林SDGsプロジェクトで取り組んだシンポジウム、フィールドワーク、勉強会等について報告します。

## SDGs時代・サステナブルな竹林について みんなで考えてみませんか

［日時］2022年4月24日（日）13:00～16:30
［会場］まちてらすMUKO（向日市）
［主催］籔の傍
［共催］竹林SDGsプロジェクト

竹林SDGsプロジェクトのキックオフイベントとして「SDGs時代・サステナブルな竹林についてみんなで考えてみませんか」と題するフォーラムを開催しました。イベントでは、(1)同志社大学総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース大和田順子教授による講演、(2)学部生による昨年度のフィールドワークの報告（政策トピックス「SDGs時代のサステナブルな地域づくり」にて実施）、(3)市民団体「籔の傍」小関皆乎代表によるこれまでの取り組み報告、(4)グループに分かれて竹林を持続可能なものにするための取り組みについて意見交換、その後、竹林に移動し、(5)物集女竹林フィールドワークを行いました。

プロジェクトメンバー以外にも、籔の傍のメンバー、向日市議会議員、市役所職員、企業関係者、竹の研究者、地域住民、学生など、様々な立場の40名以上の方々が参加しました。様々な視点からの意見が出される中で、竹林の活用や間伐竹の活用についての視野が広がるとともに、参加者皆さんの竹林愛を感じました。

## メンマづくり体験

［日時］2022年4月30日（日）10:00～14:00
［会場］籔の傍・物集女竹林
［主催］籔の傍

籔の傍での活動の1つであるメンマ作りに参加しました。メンマはどのようにしてできるかご存知ですか？メンマは筍が1メートルほど伸びた筍を使います。まず代採し、頭を切り、皮を剥いだ後、メンマのサイズに切ります。次に、お鍋で1時間ほど茹でて柔らかくします。最後に塩漬けし、1か月ほど置き乳酸菌発酵させます。食べる際には塩抜きし、醤油やみりんなどの調味料で味付けをして完成です。

日本の市場に出回るメンマの99%は輸入品であるため、この国産メンマは非常に珍しいものですが、近年は各地で地元の竹を使ったメンマづくりが広がっています。竹林の竹は適度な間隔を保つことで美しい竹林を保つことができます。筍として取りきれず、また親竹以外のものをメンマ用として有効利用し、景観の保全に努めました。

京漬物会社の亀蔵が物集女竹林の伸びた筍を原料に商品化したメンマ

## 竹を知る会in物集女竹林

［日時］2022年6月19日（日）10:30～14:00
［会場］籔の傍・物集女竹林
［主催］竹林SDGsプロジェクト

竹林SDGsプロジェクト主催の「竹を知る会　in物集女竹林」を開催し、11名の同志社大学の学部生が参加しました。イベントでは、(1)竹の研究者である小林慧人さんによる講義、(2)竹林整備、(3)竹の器・昼食作りを行いました。小林さんは、京都大学大学院農学研究科、同志社大学理工学部研究員を経て、現在は国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所関西支所に所属しておられ、竹の生態について研究されてきました。講義では、10問の竹クイズを交えながら、竹の生態や活用についてのお話をしていただきました。講義を聞いて、竹はイネ科の植物であること、また、竹の芽が生えてくるのは1平方メートルに約200個も芽が眠る中でそのうち1つ生えてくるかこないかの確率であることに驚きました。竹は知れば知るほど奥の深い植物であることを改めて感じました。

## 竹林の生物多様性勉強会

［日時］12月10日（土）15:00～17:00
［会場］SUBAKO（向日市）
［主催］竹林SDGsプロジェクト

植物生態学がご専門の湯本貴和先生を講師に、竹林の生物多様性やグリーン・コモンズとしての竹林の可能性についてご講演いただきました。自然を適切に管理し、生物多様性を高めることの重要性が指摘されました。（詳しくはP.09をご覧ください）



## 地域づくり授業フィールドワーク

【日時】2022年11月6日（日）10:00～15:00
【会場】籔の傍・物集女竹林
【主催】竹林SDGsプロジェクト
【協力】藪の傍

大和田教授が担当する学部授業「SDGs時代のサステナブルな地域づくり」のフィールドワーク参加学生（7名）および、京都府地域つながる未来プロジェクトの大学生メンバーなどを加え、計24名で竹林に親しむ活動（竹筒ご飯作り、竹林整備等）を行いました。

＜オリエンテーション＞
一日の流れを説明し、主催者紹介、参加者自己紹介を行います。

＜竹筒を作る＞
まず、竹林に入ります。昼ご飯に使用する竹筒は、竹の年数や安全性などを考慮して切る竹を選び、切り、竹筒を作ります。

＜竹筒ご飯を作る＞
ご飯を作るグループと、竹林整備グループに分かれます。
ご飯を作るグループは、切り出した竹から竹筒を作り、焚火でお米を炊きます。その他、チキンラーメンや豚汁も竹筒を器にしていただきます。

＜竹林を整備する＞
竹林整備グループは、枯れたり倒れたりしている竹を切り出し、1か所にまとめながら片づけていきます。整備した竹林には美しい景観が広がり、春にはタケノコも期待されます。
（写真左：整備前　写真右：整備後）

＜お昼ご飯＞
竹林での昼食は格別です。竹筒で炊いたご飯、豚汁、そしておかずには世界農業遺産認定地域から宮崎県椎葉村の原木椎茸の含め煮、和歌山県みなべ町から梅干し、籔の傍・物集女竹林オリジナルメンマなどが添えらました。

＜食後の散歩＞
食後は竹林浴を楽しみながら、近くの「京都市洛西竹林公園」まで歩きます。左右に広がる竹林では、11～12月頃は、京都式軟化栽培で藁を敷いたり、土入れをするなど、美味しい筍の準備が行われています。竹林公園の竹の資料館の室内には竹の特徴や使途に関する展示があります。約5,000㎡の生態園には国内外約110種類の竹笹類を見学することができます。

＜「藪の傍」小関代表によるお話し＞
フィールドワークの最後は、竹林を整備・活用する市民団体「籔の傍」の代表 小関皆乎さんのお話しです。竹林の課題、籔の傍の5年間の活動内容や成果についておうかがいしました。
（詳しい活動内容についてはP.12）

【活動報告】
塚田悠暉、平山明見、写真：佐々原悠馬、平山明見、小関皆乎、大和田順子

# 活動団体紹介

2022年度の本プロジェクトにご協力いただいた
ボランティア団体を紹介します。

## 任意団体 籔の傍（やぶそば）

向日市、向日丘陵に位置する物集女（もずめ）竹林（物集町長野地内）を拠点に放置竹林の整備をしながら、竹・竹林の活用に取り組む「籔の傍」（代表：小関皆乎さん）。今回、竹林SDGsプロジェクトの活動フィールドとして、セミナーやワークショップ、フィールド・ワークの開催などにご協力いただいた。「籔の傍」は、2017年に活動を開始し、元タケノコ畑であった放置竹林を、皆が集う竹林広場やタケノコ畑へと整備しながら現在に至っている。当初、借り受けた竹林は300坪であったのが、今では6,000坪（2ha）となり活動範囲が広がっている。

竹林は、活動日やオープンイベント開催時には開放されており、見学や参加ができる。

楽しく和やかに交流できる竹林、各々やってみたいことが実現できる場として活用していくうちに、自然と多様な人々が訪れ、協力し合いながら整備が進んでいった。そして美しい竹林か蘇っていくと、小関さんは話す。

交流スペースの広場には、間伐竹を利用した遊具やテラス、18畳の桟敷などがあるが、このような造作物は京都建築専門学校の協力を得て製作されている。桟敷では合気道教室が開かれており、向日市制50周年記念の落語会も開催された。デイキャンプなどに訪れる親子連れの参加者は、遊具で遊びテラスで食事を楽しんでいる。

タケノコ畑では、京都式軟化栽培法を学びながら実践、年間を通じて手入れを行っている。特に、力仕事である敷きワラや土入れには、多くの人が参加している。そして勿論、タケノコ掘り体験にも多くの人が訪れる。

竹林整備を持続可能にしていくためには、竹の出口、竹・竹林の利活用をセットに考える必要がある。今の時代と現状に応じた竹林活用を考え自らチャレンジするとともに、籔の傍は、関わる人々の様々なチャレンジと実践のインキュベーター的な役割を果たしているのではないかと思う。

大学生ボランティア受入れ事業、高校生のフィールド・ワークへの協力、新たな竹林デザインを考える講座の開催、企業と協働した純国産メンマの開発等々、放置竹林の整備と合わせ、次の展開に向けての準備がなされている。

籔の傍の活動から、任意団体「籔の竹ぼうき」（代表：寺崎正直さん）が2021年に立ち上がった。「間伐竹で作った竹ぼうき」で清掃活動を行い、間伐竹の有効利用と遊歩道美化を行っている。また、竹ぼうき作りや竹工作のワークショップも開催している。なお、籔の傍は、竹垣を市道脇に設置し土砂流出防止と景観の向上に貢献し、2021年度手づくり郷土賞（国土交通大臣表彰）を受賞するなどの実績を持つ。（「竹の径」に倣え「籔の径」景観づくり～市民による手づくり郷土ランドスケープ～）

活動・イベント/問い合わせはFacebookページまで

【籔の傍FB】https://www.facebook.com/yabunosoba/
【籔の竹ぼうきFB】https://www.facebook.com/yabunotakebouki/

ボランティアが整備した籔の径

竹林広場でデイキャンプ

マイ竹ぼうき（竹工作）

## 向日市竹林ボランティア
（向日市・竹林ボランティア活動推進事業）

向日市竹林ボランティアは、2020年秋から、名産であるタケノコや美しい竹林景観を大切に守るため活動を開始した。活動場所を広げながら、主に向日市が整備した適正管理モデル竹林（物集女町長野地内）にて、竹の伐採や土入れ、タケノコの収穫などタケノコ栽培の一連の作業を行っている。栽培は京都式軟化栽培法で行われ、京タケノコの美味しさの秘密とタケノコ栽培に纏わる文化を知ることができる。

「竹林内での作業は気持ちが良く、心身ともリフレッシュできる」「自分で育てたタケノコはとても美味しい！」など、竹林ボランティアの方々から「参加して良かった」と喜びの声を多数お聞きしている（市の担当者）とのことで、よい雰囲気の中、竹林整備が進んでいる。

現在、約40名がボランティア登録し活動している。今後、さらに手入れの行き届いていない市内の竹林にも活動場所を広げていきたいことから、仲間を増やすべく、ボランティアの募集を随時受け付けている。

【向日市竹林ボランティア】
〈対象〉
向日市の竹林に興味をお持ちの18歳以上の方
〈活動日〉
毎週火曜日と土曜日の午前9時30分～11時30分
（当面の間、上記の日時で活動。天候や作業の進捗状況により中止や時間・場所の変更があり。詳しくは産業振興課まで問合せ）
〈問合せ・応募方法〉
電話(075-874-2485)
または電子メール(sangyo@city.muko.lg.jp)で
産業振興課まで。

土入れ作業中



# 先進地視察

## 事例1：若竹の杜 若山農場

美しい緑の竹林風景や瑞々しい竹の様子、夜の幻想的なライトアップ、大きな竹ブランコ…　日々発信される魅力的なインスタグラムにときめき、「若竹の社 若山農場」（運営：株式会社ワカヤマファーム／代表取締役　若山太郎さん）は、以前からぜひ訪れたいと思っていた場所であった。栃木県宇都宮市の北部、東京都心からは車で約1時間半、日光へ観光に行く際にもルート的に立ち寄るのによい立地である。

若山農場は、24haほどの圃場を有し、この地で親子三代に亘り百年余、「農業とは土づくりに在り」の言葉を信条に、自然循環型農法を心がけ筍と栗を中心に作り続けている。

竹林は約21haに及び、計画的に毎年休むことなく間伐などを徹底し管理され、稀にみる清々しく美しい圧巻の竹林景観が生み出されている。竹林管理を通して、筍の生産販売（筍水煮やメンマなどの加工品も商品化されている）、竹材の生産販売、そして、竹の品種改良・苗木生産販売が行われている。小型の孟宗竹「ヒメアケボノモウソウチク」は先代社長が開発、若山農場は、日本庭園だけでなく、近代的な都市空間に竹の植栽を進める第一人者である。

竹林を活用した観光事業は2017年に開始し、入場料を設定し竹林を一般開放している。コロナ禍にあっても入場者数は増加し、人気のスポットとなっている。入場者の年代では20代が6割を占めるとのことである。

今回は、竹林散策ほか、竹林風景を楽しみながら竹の器でお抹茶とお菓子を頂いた。竹の葉音ときらめく木漏れ日、竹の緑に包まれる心地よい時間を過ごすことができた。

「野宿」という竹林キャンプ体験もあり、土を傷めないよう空中テントで宿泊する。次回はぜひ竹林で泊まってみたいと思った。訪問時に準備中と伺った「竹のギャラリー」は2022年11月にオープン、今後、レストランなども併設予定とのことで楽しみである。

映画、CM、ドラマなどのロケ地利用催事などの貸し出しを行うロケーション事業も行われている。竹林の一般開放のきっかけは、映画のロケ地として話題となり、見学者が竹林に入り感動する姿を見て、「より竹林を身近に感じてもらえたら」という思いからとだそうである。

竹林を生産の場として、また観光資源として多様にかつ関連性をもって利活用し、持続可能な緑地・竹林を形成することでビジネスを展開させる、素晴らしい取組みであると思う。

2022年10月2日訪問
〈施設名〉
若竹の杜 若山農場
〈運営会社〉
株式会社ワカヤマファーム（農地所有適格法人）
〈所在地〉
〒320-0075 栃木県宇都宮市宝木本町201
〈営業品目〉
農産物・加工品、竹材・竹苗（竹植木）の生産販売、観光・イベントの開催、撮影・イベント場所の貸出
HP：https://www.wakayamafarm.com/

## 事例2：純国産メンマプロジェクト

第4回純国産メンマサミットin淡路島
【日時】2022年11月26日(土) 13:00～17:00
【場所】洲本市文化体育館文化ホール「しばえもん座」
【主催】純国産メンマプロジェクト
【主管】あわじ里山プロジェクト
【後援】林野庁、兵庫県、洲本市

2022年11月26日、第4回「純国産メンマサミット」が淡路島で開催された。全国各地から約300名の竹林に関心を持つ人々が集まった。第1回は2017年12月に京都で開催され約60名が参加したそうだ。日本各地で増加する放置竹林をなんとかしたい、資源として活用したいと動き出した人々は点から面となり、着実に拡がりを見せている。

今回のテーマは、「竹の資源化」。メンマづくりをはじめ、竹林や竹の幅広い活用事例が紹介され、情報共有と活気ある交流の場となっていた。竹林の活用に携わっている、または竹林活用を始めようとする団体や人、研究者、地元の方々など多様な人々が一同に会し、竹林・竹について熱く語り合う、開かれた大会であった。各地で竹林に関係した活動を行う大学生が、サミット運営等に多く参加している姿があり、若い世代への拡がりも感じた。

純国産メンマプロジェクトは、代表の日高榮治さんによれば「純国産メンマなどへの利活用によって増加する放置竹林の資源化を図ることで、竹林整備及び森林の公益的機能の発揮に寄与することを目的とする国内唯一の全国組織」である。35都道府県から73の団体・個人が「美味しく食べて竹林整備」の合言葉のもとに集まり参画している。（2023年2月現在）

全国の竹林整備に役立つよう、日高さんが何年もかけて研究した孟宗竹や真竹を純国産メンマに加工するための独自の方法も公開している。メンマサミットをはじめ、竹林整備に役立つ情報の発信や意見交換の場を設けるなど、放置竹林について一緒に考え解決していく推進役となっている。

竹林の整備は、強い繁殖力を持つ竹を相手に、継続的に手入れをして行く必要がある。竹をどのように活用して行くか、資源化し経済的にも成り立つモデルを構築することが持続可能な竹林整備に繋がっている。純国産メンマプロジェクトもそのモデルの一つであり、優れた仕組みを持った取り組みである。

ラーメンには欠かせないメンマであるが、炊き込みごはんの具や、洋風や和風など新たな製品として多様な純国産メンマが開発されている。サミットの会場では、各地からの特色あるご当地メンマの販売コーナーが設けられ大変盛況であった。向日市物集女（もずめ）産の「京めんま松竹梅」「本気のめんま」（いずれも京漬物・初代亀蔵）も出品しており、好評を得ていた。

純国産メンマは、食の安全性や地域の特色を活かせるユニークさを持ち、エシカル消費やSDGsに貢献する製品である。今後も各地の竹林の状況に応じた、地域に役立つメンマとして進化し、また各地で新たな商品開発が行われていくだろう。竹林整備が進み、国産メンマが当たり前になる頃には、各地で美しい里山が再生され、多くのグリーンコモンズが生まれていることと思う。

純国産メンマプロジェクトHP
https://www.japan-menma.com/

事例1・2とも 文・石田眞由美

# プロジェクトのふりかえり　大和田 順子

## 都市のグリーン・コモンズ

本プロジェクトでは、向日市の竹林をフィールドに、荒れた竹林を市民団体が様々な活動を通じ、環境面（筍畑の再生、景観再生等）、社会面（地域内外の多世代が集い協働、大学生の地域学習の機会等）、そして経済面（伸びた筍を活用したメンマの商品化等）といった三側面から統合的に取り組み、多様なステークホルダーが参加する竹林グリーン・コモンズが創出され、SDGsの複数の目標に関連する活動が実践されている状況について参与観察を行った。

この活動は、飯田ら（2020）が「都市のグリーン・コモンズは、まさに「経験の再生」をする格好の場所である。その場の生態系管理に主体的に関わることによって、ただ公園などを利用するだけでは得られない、より深い経験が得られるだろう。また、共同体内に蓄積された社会生態的な知識は、世代を超えて共同体内で継承されうる。なお、「経験の再生」とは、一度消失したり劣化したりした自然を市民の手で再生することは、負のスパイラルを正のスパイラルに転換する作用、すなわち「経験の再生」（regeneration of experience）を促す作用があるのではないだろうか。」と述べていることに多くの点で合致すると言えるだろう。

また、都市のグリーン・コモンズ（UGC：Urban Green Commons）についてはColding and Barthel（2013）が、「都市で育むことが重要な様々なタイプの学習の流れや価値観、例えば環境や生態系の学習、社会組織に関する学習、都市空間の政治、社会起業家精神、さらにはポジティブな場づくり、コミュニティ・エンパワメント、環境の再生、民主的価値の育成と関連性を持っている。」と述べているが、これらの要素に関しても合致している項目が多い。

ちなみに竹林活動を行っている「籔の傍」は、竹林所有者から竹林の使用期間・面積などに関して使用許可を得て整備・活用を行っている。市民によるボトムアップ型のボランタリーな管理・運営形態であり、市役所はその活動に関与していないが良い関係を保っている。代表の小関氏や活動に集まっている人たちが、様々な活動を主体的に行っている自由度の高さが特徴である。筆者は、この竹林に環境や生態系の学習、社会組織に関する学習、ポジティブな場づくり、景観の再生といった主に学習面の可能性を感じ、学部生のフィールドワークの場とした。

## 竹林学習プログラムとその効果

竹林での活動は2021年度から授業で活用させていただいている。2022年の春学期は学部授業「NGO論・NPO論」の受講者で希望する学生を対象にフィールドワーク（6月19日「竹を知る会in物集女竹林」、P10）を行った。参加した7名の大学生のアンケート調査による感想を整理すると以下の通りである。

●**楽しさ** 屋外で複数人の人と協力して何かをすることは楽しい。（一緒の作業、一緒のご飯）／竹の遊具（ブランコなど）で遊ぶのが楽しい。

●**リフレッシュ** 竹林で過ごす時間、竹林を五感で感じてリフレッシュできた。

●**竹の知識** 竹林や竹のこと、竹の有用性などを知ることができた。

●**コミュニケーション力** 大学生活だけでは出会わないような多世代の人と出会い話や活動が一緒にできた。

●**SDGsの体験** 竹林整備という体験を通じて環境（景観）再生活動を体験／竹を伐り、器を作り、食事の後には持ち帰る、または燃やす。環境負荷の低い素材。

●**竹の可能性** 竹（工芸品、竹の器、竹垣、プラスチックの代替）のある暮らし。

このように、活動の楽しさ、リフレッシュ、多世代とのコミュニケーション、SDGsの体験、竹の可能性などが挙げられている。

また、秋学期の政策トピックス「SDGs時代のサステナブルな地域づくり」では、2022年度も竹林SDGsもフィールドワークのテーマに設定した。学生は自分が興味のあるフィールドを選び、秋学期中に1回以上現地の活動に参加する。事前の授業での学習では、フィールドのコーディネーターより地域の現状や課題、めざす方向性などについてお話しいただく。続いてフィールドワーク（P12）に参加する。その後、グループごとの課題解決の方策を議論し、企画を立案するという学習プログラムである。本プロジェクトを通じ、竹林でのフィールドワークの内容を構築することができた。

2022年11月6日、フィールドワーク

## 世界農業遺産の視点

向日市の竹林は都市部に立地しているが、農山漁村で継承されている伝統的な農林漁業システムを認定する「世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems）」（以下、GIAHS）制度にも着眼した。GIAHSは2002年にFAO（国連食糧農業機関）によって創設された制度で、日本には2011年に導入され、現時点で13地域が認定されている。近畿では「みなべ・田辺の梅システム」（2015年、和歌山県）と「森・里・湖（うみ）に育まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」（2022年、滋賀県）が認定されている。

筆者はGIAHSとSDGsの関わりや、GIAHS認定地域の活性化に関する研究を行っているが、この５つの認定基準は、GIAHSに認定されていない地域にも有用な示唆を与えると考えている。基準を乙訓竹林にあてはめたのが表1である。

表には京都式軟化栽培など上質なタケノコの生産技術（詳しくはP６）、京銘竹や京竹工芸（P８）、食文化、美しい景観、竹林保全活動（P12）、竹の文化を活かした暮らし（P７）、竹や竹林の新たな事業の可能性（P13）などを記載した。また、環境保全や生態系の側面（P９）では、孟宗竹は環境省により産業管理外来種（産業または公益的役割において重要であるが、利用上の留意事項が求められるもの）に指定されており、適切な管理が周辺の生態系の保全に欠かせない。一方でキヌガサタケなど希少なキノコも竹林には生えている。

表1．世界農業遺産５つの基準の乙訓竹林への適用

| 1．食料及び生計の保障 | 2．農業生物多様性 | 3．地域の伝統的な知識システム | 4．文化、価値観及び社会組織 | 5．ランドスケープ及びシースケープの特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 申請する農林水産業システムは、地域コミュニティの食料及び生計の保障に貢献するものであること。 | 申請する農林水産業システムは、食料及び農業にとって世界的に重要な生物多様性及び遺伝資源が豊富であること。 | 地域の伝統的な知識システムが、「地域の貴重で伝統的な知識及び慣習」、「独創的な適応技術」及び「生物相、土地、水等の農林水産業を支える天然資源の管理システム」を維持していること。 | 申請する農林水産業システムには、地域を特徴付ける文化的アイデンティティ、風土、資源管理や食料生産に関連した社会組織が存在すること。 | 長年にわたる人間と自然との相互作用によって発達してきたランドスケープやシースケープを有すること。 |
| ・京都有数（国内有数）の高品質の筍の産地<br>・京銘竹、京竹工芸、生垣・造園・建築の原材料<br>・竹林・竹・筍を活かした新規事業 | ・竹林整備による景観や生物多様性の保全<br>・キヌガサタケなど希少なキノコ<br>（孟宗竹は産業管理外来種） | ・延喜式（平安時代、927年）に朝廷へ「筍竹」を貢進する「乙訓園」が史料として登場<br>・京都式軟化栽培 | ・江戸時代には竹材としての利用が盛ん<br>・京都における質の高い伝統的な竹工芸や建築、竹文化の継承<br>・食文化：筍料理<br>・竹のある暮らし<br>・竹林ボランティア | ・向日市歴史的風致地域維持向上計画<br>・「竹の径」など竹林景観の整備、竹林による癒し効果 |

出典：筆者作成

## 今後の課題と展望

本研究の目的は、乙訓竹林をフィールドにした調査・研究・実践活動から、竹林グリーン・コモンズの創出を通じた研究課題の解決策を検討することと当初設定した。

３つの課題の一つ目、放置竹林問題については荒れた竹林の整備には人手が必要であるが当該地域は周辺に住宅などがあることから、活動の意義や楽しさが広まればボランティア参加者を獲得することは可能だろう。二つ目の地域住民がこの貴重な地域資源の価値をあまり理解していないことについても今後は、本冊子を活用し、「籔の傍」との協力し、竹林SDGsの意義や具体的な実践活動について政策提言や普及啓発に努めたい。また、SDGsは世界の共通課題であるが、まずは自分ごととして理解し、身近な課題から取り組むことも重要であることを併せて提言していきたい。三つ目の大学生など若い層が竹林の生態や、都市や農村の生態系・生物多様性への関心・理解が低いことについては、学生対象のフィールドワークの内容や学習効果について学内外の教育関係者に広く紹介していきたい。

環境面、社会面、経済面の統合的な取組としての「竹林グリーン・コモンズ」の創出と深化は、多くの可能性を有しており、今後も調査・実践活動を継続していきたい。また、乙訓竹林全域での調査をはじめ、筍料理などの食文化面についても調査を広げ、「京都乙訓竹林システム」の全体像を明らかにしていきたい。

なお、本プロジェクト終了後の研究の発展性としては、荒廃している竹林は全国にあり、全国的な課題でもある。竹林をSDGsや世界農業遺産の観点から捉え、学際的な調査研究を行うとともに、多世代の様々なステークホルダーが竹林での学習や保全活動を通じ、竹林グリーン・コモンズの創出、すなわち持続可能な竹林保全活用の仕組みを構築していくことは、拡張性・発展性があると考える。


参考文献

飯田晶子・曽我昌史・土屋一彬、『人と生態系のダイナミクス ３都市生態系の歴史と未来』（2020年朝倉書店）第５章自然の恵みと生物多様性を活かした都市づくり、P147～151

Johan Colding a b, Stephan Barthel a,b,c,（2013-2） The potential of ‘Urban Green Commons’ in the resilience building of cities. Ecological Economics Volume 86, February, Pages 156-166


## 実行委員コメント

2023年1月15日、オンラインで実行委員の意見交換を行いました。以下はその要旨です。

**〈佐々原 悠馬〉** 全ての活動に参加できたわけではありませんが、年間を通してイベント案内の制作や竹林整備、フィールドワークに関わり、主に写真撮影を担当しました。最初にプロジェクトの計画書を見たときには、「ほんまにこれできるんか」と思いましたが、楽しく最後まで実施できました。4月からは出身地である香川県丸亀市の離島に移住して地域活性化の活動を始めます。そこにも放置竹林があるので竹林SDGsで学んだことを活かし、活用法について色々考えてみたいと思っています。

**〈塚田 悠暉〉** 最初、竹林には興味がなかったのですが、２回生の時は授業のフィールドワークに、今年度はプロジェクトの実行委員として参加することができました。実際に何度も現地に足を運び、地元の方々から色々なことを教えてもらうことは、自分の竹林に対する可能性を広げてくれるものでした。また、活動の仕組みづくりや学部生のフィールドワークのサポートも行いました。竹林整備やご飯作りなど共同作業によってつながりを深められたことが一番嬉しかったです。だんだんと地元の方々と顔見知りになっていくことが活動を続ける原動力になっていました。卒業後も継続的に関わりたいと思っています。

**〈平山 明見〉** 大学に入ってずっとコロナ禍だったので何もできないことにもどかしさを感じていました。昨年度の授業で提案したことが、このようにプロジェクトとして継続して感動しています。一番のチャレンジはインスタグラムの開設と運営でした。投稿の仕方もわからなかったのですが、色々な写真や情報を投稿しました。また、近江兄弟社高校のSDGs授業でプロジェクトの紹介を行ったことはとてもいい経験になりました。大学のゼミでも竹筒を使った植木鉢を皆で作りましたが評判でした。何か新しいこと、自分が考えたことを実現できたのはとてもやりがいを感じましたし嬉しかったです。また、SDGsというと、とても現代的なイメージがありましたが、意外と昔の暮らしに戻ることがSDGsにつながってるのではないかと思いました。

**〈石田 眞由美〉** 一番印象に残っているのは、11月6日の学部授業のフィールドワークです。実行委員の皆さんがリーダーシップを発揮して、学生に作業の仕方を教えながらスムーズに進めることができました。皆さんのその姿が素晴らしいなと本当に思いました。籔の傍のメンバーの皆さんも、若い学生の皆さんが参加してくれるのは、とても楽しみのようです。代表は70代ですが、次世代の30代、40代、50代の常連参加者の方々が、それぞれに好きなこと新しいことを始めて活動が広がっています。プラスチックが竹に置き換わって現代があります。今度は竹返りする時代かなと。今後は竹のある暮らしを国内外で紹介していきたいと思います。

イラスト：森 麻衣子（パワープレイス株式会社）
制作：シティライフNEW